

カラー
INTERVIEW
義家弘介さん
横浜市教育委員会教育委員
27

特集

文化ボランティアで 日本を元気に！

○巻頭言 文化ボランティアの展望	
＜宇都宮大学教授 廣瀬隆人＞	4
○事例紹介1 文化ボランティアが〈あなたと日本を〉元気にする！	
＜文化ボランティア全国フォーラム実行委員会＞	6
○事例紹介2 九州国立博物館のボランティアについて	
＜九州国立博物館＞	10
○事例紹介3 音楽とボランティアが、まちの個性を奏ではじめた	
＜全国音楽ボランティア札幌フォーラム実行委員会＞	12
○事例紹介4 学生文化ボランティアの可能性	
＜京都橘大学＞	14

まなびのまち 埼玉県松伏町	16
---------------	----

地域とともに地域づくりを担う若者を育てる大学	
＜松本大学＞	20

ESDの10年が始まりました	24
----------------	----

●行政と協働ですすめるみどりの施策	
＜NPO法人 武蔵野自然塾＞	32

●新しい出逢いと学びの場づくり	
＜盛金WACローカルアクティベーション協議会＞	36

まちづくり・人づくりを担う生涯学習インストラクターの会	
＜財団法人 社会通信教育教会＞	40

やって良かったね ボランティア	
＜静岡県菊川市体験活動ボランティア活動支援センター＞	42

私の子どもから私たちの子どもへ 私たちの子どもから、 地域みんなの子どもへ！	
＜NPO法人子どもネットワーク・すてっぷ＞	45

●突撃レポート	31
●まなびピアいばらき2006④	48
●Manabee News	49
●編集後記	54

生涯学習の総合情報誌

マナビィ



2006年

7月号

No.610

文部科学省編集

連載

まなびの新風

——あのまち・このまち——

大学等との連携によるまちづくり

こんにちは環境省

事例クローズアップ

挑戦！企業が取り組む生涯学習

やってるよ！ボランティア

～自分も輝く 地域も輝く～

子育てするならわがまちで

全国から二五〇名を超える文化ボランティアが集まった二日間 文化ボランティア全国フォーラム二〇〇六 文化ボランティアが「あなたと日本を」 元気にする! 「出会う・つながる・動き出す」

文化ボランティア全国フォーラム実行委員会

去る三月一〇・一一日、全国の文化ボランティアが交流する「文化ボランティア全国フォーラム二〇〇六」(文化庁委嘱事業)が催されました。会場となった埼玉・武蔵嵐山にある国立女性教育会館(ヌエック)には、北は北海道、南は沖縄と各地から、大学生から七〇代までの老若男女約二五〇名が集まりました。日ごろ、全国の津々浦々で音楽や美術、歴史、自然、演劇など文化の分野でボランティア活動している面々が、交流し学び合いました。さらに、すごいことに河合隼雄文化庁長官が全日程を参加されました。力の入った、かつ和やかでユニークなフォーラムとなりました。

気運が渦のようになって、多士済々の実行委員会が、では、その当日の模様に入る前に、この初めての「実行委員会による全国フォーラム」の企画段階から紹介しましょう。「文化ボランティアが集う全国フォーラムを開催したい」。その企画が持ち上がったのは二〇〇五年夏の初めでした。長年、文化ボランティアとして活躍し、そのコーディネートもする大久保邦子さんは、近年の全国各地での文化ボランティアの盛り上がりを感じ、一方、行政担当者や施設担当者とのすれ違いから「交流」の必要を感じていました。

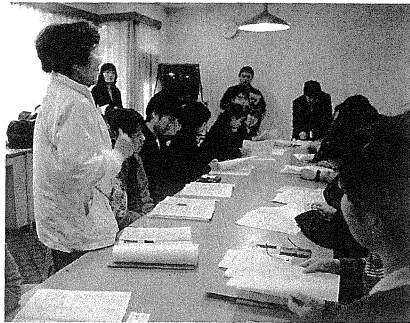
紅梅が美しく映えたヌエック
(国立女性教育会館)



公開フォーラム
での事例発表

大久保さんは、ことあるごとに周囲の人たちにそのことを熱く語り賛同する仲間たちを増やしていきましたが、すると、まさに気運が、文化庁の担当者の方にも文化ボランティア活動をしている人たちなどからそういった要望が寄せられていくというのです。

「それならば、やってみよう」。大久保さんが意志を固め、私ども事務局をすると申し出ると、文化庁も委嘱事業として応援してくれることになりました。やがて大久保実行委員長のもとに大学生も含めた全国のいろんな分野の一三人が実行委員として集まりました。ただ、全国に散らばる実行委員たちはいずれも多忙な



初日の午前9時。朝の打ち合わせで「がんばりましょう」と実行委員長の大久保邦子さん

みんなが元気になる、 四つの事例

そして、その日。全国からやってきた文化ボランティアや行政担当者、学生など二五〇名を超える参加者が次々に集まってきました。初日は、「公開フォーラム」と題して河合隼雄文化庁長官の講演と四つの事例報告です。

河合長官は「文化ボランティアで日本を元気に!」をテーマに経済だけでなく文化を育てることも大局的に見て大切なのだという長官自らが提唱してきた「文

化ボランティア」の重要性と、ボランティアをするうえで「善は、微に入り細にうがちて行わなければならない」という心構えを語りました。

各地での取組の紹介は、四つです。

最初に「八雲国際演劇祭と人づくり」。劇団「あしべえ」代表として四〇年の演劇活動が続けてきた園山士筆さんは、島根県八雲(現・松江市)で国際演劇祭を開催しました。人口わずか七〇〇〇人の村で、資金も人材も乏しいなかでの国際演劇祭です。成功できた要因は何か? 「演劇活動は人づくり」との思いから、多くの試行錯誤を経て、見事演劇祭を成功させ、地域の人づくりに貢献したその熱き活動に会場から共感の拍手が湧きました。続いて、昨年開館した九州国立博物館でのボランティア活動を紹介したのは、同館交流課の糸井茂さんです。八四二名にも及ぶ応募の中から二九三名が登録され、展示解説や教育普及などに活躍しているボランティアの現状と今後の課題が提示されました。滋賀県で美術館と学校を結び活動を展開する「子どもの美術教育をサポートする会」は、代表の津屋結唱子さんがその小さなきっかけから始まった取組がやがてトルコと国際交流をするまでになった歩みを紹介しました。学生ボ

「ボランティアを育成することは地域の貴重な財産である」といった意見がでました。そして「これからは市民一人ひとりが地域社会の構築を目指していかなければならず、その大きな力として文化ボランティアがあるのではないかと」。

報告に続いて、会場からも積極的な感想が寄せられました。「コミュニケーション」、「文化ボランティア力」のつけ方、「ネットワーク」といったキーワードが出されました。河合長官は「文化ボランティア

〈分科会六〉ミュージアム・ボランティアの課題と未来を語る

ミュージアムならではの課題は? 「館とボランティアの関係の温度差」「ボランティアの年次差」「任期制」などが話題となり、相互発展、相互承認、相互理解の大切さを確認しました。

〈分科会七〉市民活動支援の悩み相談室

「ボランティアへの理解に温度差がある」「モチベーションの維持」「情報提供の重要性」などがあがりましたが、それに対し「感謝の気持ちを伝えていく大切さ」「夢のもてる企画や運営の工夫」「ぶつかり合いの中から新しいものを生み出す努力」などが強調されました。

〈分科会八〉文化ボランティア、そのマネジメントの極意を学ぶ

「ボランティアを育成することは地域の貴重な財産である」といった意見がで



分科会「NWEC図鑑を作ろう」では、自然系博物館の八木さんが力量発揮。春を探した



分科会「市民活動の悩み相談室」では、行政職員4人が「聞き手」となっており、和やかに

文化ボランティア
全国フォーラム実行委員会事務局
■お問い合わせ
〒108-0074
東京都港区高輪2-11-230
(株) アム・プロモーション
TEL 03-5449-7033
FAX 03-5449-2023

は、箱ものの施設に血を通わせる存在なんです」とすてきな言葉を贈ってくれました。最後に大久保邦子さんが挨拶。二日間のプログラムが無事終了しました。

有志たちの実行委員会による初めての全国的な文化ボランティアフォーラム。まずは、出会うことから始まりました。参加者たちは、果たしてどのような「元氣」をお土産にしたでしょうか。それぞれの地で、芽ぶき、花咲いてほしい。実行委員はもとより、かわったみんなが願ひ、確認し合いました。

会場で集めたアンケートには、「次もやってほしい」との意見がほとんどでした。今、報告書をまとめながら、実行委員たちは次なるステップを企画中です。

文化ボランティア全国フォーラム実行委員会事務局
山下治子

文化ボランティア全国フォーラム実行委員会

☆実行委員 (順不同・※が委員長、※が事務局員)

篠田信子 (NPO法人ふらの演劇工房理事)

田中弘子 (弘前市市民会館館長)

柴田英紀 (鳥取県立県民文化会館文化芸術デザイナー)

園山土筆 (八雲国際演劇祭芸術監督 劇団あしづ代表)

八木 剛 (兵庫県立人と自然の博物館研究員)

黒沢 伸 (金沢21世紀美術館エデュケーター)

津屋結唱子 (「子どもの美術教育をサポートする会」代表)

廣瀬隆人 (宇部大学教授)

鈴木章生 (目白大学人文学部助教授)

藤田大悟 (東京工業大学大学院生命理工学研究科修士課程・日本科学未来館ボランティア)

田島博樹 (東京大学公共政策大学院法政策コース・日本科学未来館ボランティア)

大久保邦子 (文化ボランティアコーディネーター) ※

山下治子 (『月刊ミューゼ』編集長、アム・プロモーション) ※



「交流の夕べ」は多くの参加者の熱気と交流欲でいっぱい。河合長官と夢の共演。美しい音色が響いた

ランティアたちが、そのやりがいと喜びを語り、若者にとって地域でのボランティア活動の大きな意味を発見しました。科学の出前講座を展開する学生ボランティアの「Live @ Space」の発表では、身近なところから科学の面白さを広めたいというその若々しさとエネルギーが内容に好感が持たれました。

夕方から行われた「交流の夕べ」は、まさに互いに触れ合う交流の場。会場のレストランは熱気に包まれましたが、ここで河合長官のフルートと参加者による共演が催されました。三人のフルート奏者と一人のサクソフォン奏者とで計六曲が演奏され、美しい音色が参加者の心

にいつまでも残りました。

さらに夜一〇時からは、ゆったりとしたラウンジで「深夜スペシャルトーク」。秋田市前助役の松葉谷温子さんと日本図書館協会事務局次長(前浦安市立図書館長)の常世田良さんが、文化の担い手、市民と行政といった話題で語り合いました。全国の仲間と出会う夜更けは、泊まりがけならでは一場面でした。

八つの分科会と「語り場」と

二日目は、八つの分科会でスタート。午後は全体会「語り場」での報告です。なお、進行の全般にわたって学生の実行委員を積極的に登壇させ、とくに高齢者に偏りがちなこの種類の会を「若さ」を加えて表現しました。

以下は、それぞれの報告です。

〈分科会一〉学生ボランティアからの発信

学生にとっては、「コミュニケーション報酬」、「明確なゴール設定」、「自己発信」がキーワード。特に、ほめる・本当に良かったよねと確認し合う「コミュニケーション報酬」がモチベーションを上げる大切な要素であると指摘しました。

〈分科会二〉文化でまちづくり、人づくり

文化ボランティアが育つていくには、「パッション」(まちへの情熱、「ミッショ

ン」(できることをやる)、「対等・平等な関係を築くこと」、「柔軟な対応と進化していくための工夫」などが重要と話し合いました。

〈分科会三〉地域で子どものアートを支援する

行政側と文化ボランティア側との対話となりました。行政からは「支援をしたが、強力なボランティアと出会いがない」との悩み、文化ボランティアからは「頑張っているが行政の理解が得られない」といった声がありました。現場を共有しながら、できるだけのことをしようという一致しました。

〈分科会四〉公共文化施設とボランティア指定管理者制度などについて市民、NPOがどのように対処できるかがテーマです。大田文化の森運営協議会など二つの事例などから、施設運営では「継続性」「スタッフの質」「専門性を評価」などが課題としてあがりました。

〈分科会五〉野外ワークショップ「NWE C図鑑をつくるう」

唯一のフィールドワーク型の分科会。広い敷地内を散策して参加者それぞれがデジカメで撮影し、それをもとに「NWE C図鑑」を完成させました。参加型のプログラム案にもなりました。

編集後記

今月号で「マナビィ」が誕生して5年になります。「マナビィ」は過去の編集担当者の熱い思いにより、事例を集め、編集し、生涯学習総合情報誌として全国に情報提供してまいりました。

私が本誌の編集を担当して3か月程ですが、全国にある様々な事例を掘り起こし、少しでも読者のみなさまの参考になる情報を提供していきたいと頑張る今日この頃です。(K・U)

月刊

マナビィ 7月号

第61号

2006年7月1日印刷

2006年7月1日発行

著作権所有 文部科学省©

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社

〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部

〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

TEL 03-5349-6666 (第1営業部)

URL <http://www.gyousei.co.jp>

印刷所 ぎょうせいデジタル株式会社

定価600円 本体571円 税76円

年間購読料7,200円(税・送料込み)

- ・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
- ・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

- 本紙掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。
- 添え付けのハガキでご意見、ご要望等をお寄せください。

広告の問い合わせ・申し込み先

株式会社 ぎょうせい 第1営業部 広告課

電話 03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

Printed in Japan 2006 ISSN 1346-6593

- この刊行物は再生紙を使用しています。

月刊

マナビィ

8

月号予告

特集 IT新改革戦略 時代の『学び』

まなびの新風—あのみち・このまち—

岩手県軽米町

大学等との連携によるまちづくり

鳥取県智頭町

やってるよ! ボランティア

株式会社北陸チューリップ

■読者の声■

- ・本誌6月号インタビューのノッポさんですが、ノッポさんの人柄や考え方が伝わってくる内容で、参考になりました。また、事例クローズアップは、両方とも個人的に関心を持っていた取組でしたので興味深く読みました。市民との協働の重要性や、地域活性化の一手法として大変参考になりました。しかし、「挑戦! 企業」等、ちょっと説明的過ぎる記事も多いので、もう少し内容を膨らませてもらえればもっとよかったですと思いました。(埼玉県在住 男性 30代)
- ・まもなく3歳になる我が子の成長を見ていると、子どもが読書(読み聞かせ)を通して言葉を獲得していくことが実感できます。本誌6月号「これからの図書館の在り方検討協力者会議」報告書にもあるとおり、「生活圏ごとに図書館サービスの拠点を整備すること」はとても重要です。文字・活字文化振興法に示されている理念等がより実効あるものとなるよう、関係者が努力していくことが必要です。(栃木県 男性 40代)

本誌は、生涯学習の総合情報誌として多様な情報を含んだ紙面構成に努めております。読者の皆様に愛される紙面づくりのためには、皆様からの貴重なご意見やご感想が何よりも重要です。本誌へのご意見やご感想、又は本誌に取り上げてもらいたい地域づくりの事例などがあれば、編集部までご連絡いただければと思います。

(編集部メールアドレス: chiki@mext.go.jp)